
陰から光へ放り出されて…

kan_sta_ku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰から光へ放り出されて…

【Zマーク】

Z4340X

【作者名】

kan_sta_ku

【あらすじ】

普通の少年を振る舞って、自分がイレギュラーであることを隠していた少年がある事件のせいで公となってしまう

そんな少年はいろんな出会いで何を思い何をするのか…

シリアスっぽい感じが少しありますがそこまでシリアスはない予定
です。たぶん

感想、アドバイスなどもらえると嬉しいです

「んっ……」

1人の少年が目を覚ました

「うーん……えい？」

少年は辺りを見回す

部屋にはベッドとトイレ以外何も無い

「誰か居ないのかな？」

少年はベッドから降り、扉のほうに歩いていく

扉はセンサー式のようだが、反応せず全く開きそうにない

「僕はなんでこいつらにこなされたんだろう？」

少年は思い出せるとしてみると、思い出せない

知識は思い出せるのに、自分が何者なのか思い出せないのだ

この世界においてイレギュラーであるところのことを除いて…

その時、小さなモーター音が聞こえてくる

通気ダクトから小さな機械が飛んで入ってきた

少年は咄嗟に身構える

「そんなに身構えないでよー」

とこからか声が聞こえてくる

少年は辺りを見回すが部屋の中にはたれもしない

「たよ!!」
「あ
そ
う
が
忘
れ
て
た
ほ
い」と

機械力展開しモードIが現れた

モーダーははるか昔を一叶が女性が種子している

「二」語

ええええ！？】んなどきに斤談^{ハハ}！？】へん！？】

11

えーと?志季くん?如月志季ぐーん?私だよ?束さんだよー?」

「 束さん……？え？あ、あああーー思い出したーーもう僕のことが忘れてると思った 」

「そんなわけないよーー!! 突然行方不明になつてビックリしたよ…

そんな事よつ助けに来たよ……。」

「助け……？」

「……なんか分かってる……？」

「えーと……」

志季が突然うずくまる

「ちよひ……しーくん！？」

志季は気を失つて倒れた

1年前……

志季は買い物の帰り、電話で話しながら歩いていた

『しーくん……ちゃんと首から下げる』

「大丈夫だよ、ちゃんと首から下げる」

『こつもちゃんと持つておいてよー？』

「はーい」

『しーくん……は……れて……』

「あれ？もしもし？切れちゃった……ん？」

志季が辺りを見回すとスーツを着た男2人女2人に取り囲まれていた

「僕に何か用？」

「ええ、私たちと一緒に来てくれないかしら？」

「…………いやだと言つたら？」

「力ずくで連れていく！…」

男2人が志季に襲いかかってくる

「くつ……なんの…? まつたく!…」

志季は先に殴りつけてきたほつの腕を掴んでひねり、地面に投げつけ、気絶させる

もう一人のパンチを受け流した後がら空きになつた腹に膝蹴りを入れダウンさせる

「さすがは如月志季くんつとこかしら」

「何を知つている？」

「情報は割と簡単に手に入るのよ……と答えておくわ

「…………何が目的？」

「あなたの才能を調べるなどなど……」

「それだけじゃないでしょ？」

「さすが、天才は違うね」

「天才って言つた」

志季は心底嫌そうな顔をする

「どう？私達に協力？」「遠慮しちゃいます」…ならじょうがないわね

女性2人の片方がハンドガンのようなものを取り出す

「ハンドガン？…いや、違うか…随分非道な手を使つんですね」

「一目見ただけで分かるなんてさすがねつ！…」

女性が志季に向かって連続で発射する

志季はサイドステップで避けながら接近してハイキックを放つ

しかし女性の体に機械が展開され、腕で防がれる

「…」

志季はバック転で距離を取り、つぶやく

「降参してくれないかしら？勝ち目はないと思つたけど……」

「あなた方の道具になんてなりたくない！！」

女性がソードを振るうのをしゃがんでかわしながら答える

女性がまたハンドガンのようなものを発射しようとすると、志季は即座に反応しそれを蹴り飛ばす

「うぐう……」

志季は相手がひるんだ一瞬を逃さず、装甲のない体の腹に1撃いれる

「Hの相手に生身で！」まで戦うなんて……」

もう一人の女性が言葉をもらす

「痛いじゃなーの……男！」ときが調子に乗るなああああ……」

IISを装備した方が一瞬で志季の目の前に移動する

「イグニッション・ブースト
瞬時加速かつ！！」

志季に向かつてソードが振り下ろされる

志季は突然の攻撃に反応出来ない

「死ねええええええええええええええ！」

『ガキンッ！……』

「まったく、冷静になりなさい、殺してどうするの？」

先ほどまで見てはいるだけだったほうの女性がエスを展開し、防いでいた

「ウサギ！」

切りかかつた方の女性が不満そうにISをもどす

「志季くん怪我はない?」

「く~…ああ、はい…う~…しまつ…た…」

志季は声をかけられ返事をしてもう一人の女性の方を見ると、光が
襲う

……そして光がおさまる

とつぜん志季がめまいでふらつく

「おひる」

光を放つた女性が即座に支える

「すみません…」

志季から抑揚のない言葉が発せられる

「いいのよ、大丈夫？」

「はい」

志季の田には感情が失われていた…

「IS適性のある天才の男の子…楽しみね」

女性は妖艶な笑みを浮かべ、志季のことを抱きかかえて空へ飛び立つた

= 1 脱出 = (脱出)

ひやびの投稿です
ちょっとグダグダで読みにくいかも?

＝1 脱出＝

「し……し……ん……起きて……しーくん……」

「おわ……」

志季が飛び起れる

「しーくん、大丈夫？」

ディスプレイの向こうで束が心配そうに志季を見ている

「あ、うん、大丈夫……いろいろ思い出しだけ……」

「やつか……」めんね、私がもう少し警戒してれば……」

「ホントだよ、なんでこんな施設一つ完全ハッキングするのに一年もかかるてるの？」

「うわっ！――プロックしてた本人がそれを壊つて――でも本人の意思じゃないから責められない――」

「ははっ、『冗談』それより時間が無いんじゃないの？”おねーちゃん”？」

「おっ、その呼び方懐かしいねしーくん……よし……じゃあ、しーくん救出作戦開始――」

束が楽しげに宣言するとさつさまで開かなかつた扉が開く

志季は素早く扉の脇に移動し、外の様子をつかがい、誰もいないことを確認すると静かに部屋の外を出る

「そういえば、しーくんあのペンダント持つてるよね？」

「バッヂ持つてる」

志季は走りながら首から下げているシルバーで、ダイヤ型のペンダントを一瞥すると、口早に答える

「よかつた！－作戦通りいけそつ！－…あ、次の角右その先に1人いるよ」

「了解」

志季が角をスピードを落とさずU字曲がるとその先にライフルを持った男が居た

「なつ…？」「お前が！？」

「くつ、よつじよつて警備兵か」

男がライフルを発砲する

志季は体をかがめてかわすと横の壁を蹴つて、男のあたまに空中回し蹴りをたたきこむ

「さつすがしーくん強ーい！…」

「まあこいつらきてからまもつぱりヒーログワングと戦闘訓練
だつたからね」

志季が苦笑いをうかべ、再び走り出す

「INの先の角を左に曲がったらエレベーターに乗つてね」

志季は息切れもすることなく走り、エレベーターに駆け込む

「操作お願」

「ラジヤー」

エレベーターは上に動き出す

しばらくしてエレベーターは停止する

「しーくん隠れて!ー!ー!

「危なっ!ー!ー

志季はドア横のスペースに隠れる

すると銃弾が飛び込んでくる

「しーくそビックリー?」

「どうしよう… 手詰まりだ」

突然金属の転がる音がする

「…？… グレネードかつ…？」

志季はどうすることもできず体をかがめる

そしてエレベーターの外から強い閃光が放たれる

「志季…！今のうちに行きなさい…！」

女性の声が響く

「じーくんエレベーターを出て右だよ…！」

志季はなりふり構わず走る

聞き覚えのある… 1年前のあの日、志季を洗脳した張本人の声に疑問を抱いて…

「…」を真っ直ぐ行つたら外だよ…！」

「了解…！」

志季はラストスパートをかけ、スピードを上げ外へと飛び出す

「……えと……」いつからどうするの?」

「大丈夫だよしーくん、ちゃんと考えた「…?…来る?…?…え?」

志季は前に転がる

すると、志季がいたところをゲームが通過する

「やつぱりか、エジが来るとやつかいだな…」

志季は辺りを警戒しながら呟く

「大丈夫だよしーくん」

「どうこう」と?

「だからさりあきちゃんと考えてるつて言つたじやん、ちよつと待つてて……よし……えいっ!…」

『防衛ロックプログラム解除、稼働モード移行中、キサラギシキ本人を確認……起動』

突然首から下げていたペンドントが光り、変形して逆三角形になり、下の角から等角に赤と黄色のラインが伸びる

「…?…まさか!?」

「やつ……そのまさかだよ ほらほら早速…」

「わかつたから、そつ急がさないでよ」

「じーくんだけたら1秒からず展開できるくせに…」 つてもう展開してるし

志季の体にはグレーを主体に赤と黄色のラインが入った4枚のワインの付いたISが展開されていた

『熱源 6 確認』

「フォーマットヒュイツテイシングやつてないのに6機もか…」

「それなら終わってるから大丈夫だよ」

？… なんで初めて展開したのに既におわってるの？

「まあそれは置いといて先に逃げなきや」

「ねえ：なんでこの機体こんなに情報提供が少ないので？レーダーの範囲は狭いし、来る情報といえば熱源の数くらいじゃん」

「戦闘能力ばかりに集中して、プログラミングするの忘れちゃつた」

「ちよつ…あぶなつ…！」

志季は遠くから高速で飛んできたエネルギー弾を後ろ向きに1回転してかわす

「ねえ――!、――へんす!――!――!」

「おー」——…「じゃないよ。——」れせつから機体性能高この普通のパイロットじゅすぐ落とされちゃひよ。——とつあんずいじゅせんにげないよ。——早くにげないと」

志季は海の方へ急発進すると低空飛行で飛ぶ

「おー、速いねしーくん」

「わっから聞きたかったけどその通信機機動力高くない?」

「まあ、束さん最新作だから。——それよりも6機付いてるよ。——」

「一度見つかっちゃつてるから、撒くのはキツいな…」

「しーくん前方から急接近してんがいるよ。——」

「Jのレーダーどんだけつかえないんだよつー。——」

そして志季の前方からエネルギー弾が6発飛んでくる

志季は右に急旋回して回避行動をとる

「ん? 何か様子が変だな」

弾は全く志季の居たところを通過していない、むしろ当たりないうな位置を高速で通過していった

「どうしてんだ?」

弾は後方で追跡してきていた6機のHSに直撃した、と同時に前方から1機のHSがやつてきた

「志季、もう警戒しないでよ……つてこいつほつが無理か…」

「どうこいつもり？ セツキのHSレベーターの時もそうだし今だつて、クロイア、あなたは施設の人間でしょ？」

そのHSに乗つていたのは1年前、志季を洗脳した本人だったから協力していただけ

「私は元々あそこの人間じゃなかつたの、一部目的が一致していたから協力していただけ」

「目的？」

志季は訝しげにクロイアを見る

「……私、前から……志季に興味があつて……」

クロイアはもじもじしながら告げた

「…………は？」

「信じてくれなくてもいいけど、私は志季の味方だからねつ……」

クロイアは志季にウインクすると急上昇して雲の向こうに消えていった

「何だつたんだ？……ん？……そういえば施設の時……」

突然志季は顔を赤くする

「あれ? しーくんどうしたのかな?」

「な、何でもない……ふつふつ（アイシング洗脳したのを）」

「しーくんそろそろ逃げたほうが…あつ」

束の通信機が煙をあけ始める

「ああ、さすがにしーくんの専用機について行くのは無理があつたかあ」「

「え？ ちよつと？」

「うん、これ、わざわざ、なまこ、専門は、」

「おはようございます！」

束の通信機は爆発して落ちていった

「だから、もうしたからいいんだ？」

「確かにこれはフランス沖だつたはずだから……方角は……あつちが北か……とりあえず陸地をめざしながら、ハッキングして警備に穴をつく

志季は空高く飛び去つて行つた

“2 出逢い”（前書き）

原作を知っている方へ

今回出てきた原作キャラの一人称は誤植じゃないです

＝2 出逢い＝

「まだ残党がいたなんて…も'つゝ…」

1人の少年が細い路地を走り抜ける

「B - 487 おとなしく私たちと来なさい…」

「如月志季だよ…その名前で呼ばないで…」

「I J H ちだよ…」

突然曲がり角の向こうから女の子の声が聞こえる

「異…いやそれは…考へてる暇はないね」

志季は声が聞こえた角を曲がる

すると曲がったすぐの所の家の扉が開いていて、黄色髪の女の子が顔を出していた

志季は迷わずそこに飛び込む

「早く奥に…」

「うん…」

2人は床下に隠れた

「もう行つたみたいだね」

「うん、助かつたよ、ありがとう、えつと…？」

「シャルロット…シャルロット…デュノアだよ」

「ありがとうデュノアさん、僕は如月志季だよ」

「シャルロットでいいよ」

「わかつた、僕も志季でいいよ」

「志季って…男の子…？」

「そうだよ…」

「そ、そりだよ…—ちょっと…女の子にも見えなくもなかつたら」

「本当の所は？」

「女の子に見えました…あつ」

「ひぐ…」

「「」めさん」

「ああ、でも男だって見抜いたのは家族以外じゃシャルロットが初めてだよーー！」

「そ、うなん、だ、大、変だ、ね…」

「うう…まあそれは置いといて、本当に助かったよ、ありがとう、何かお返しがしたいんだけどな」

「いいよ、たまたま見かけたからなんだし… そういえばなんで志季は追いかけられてたの？」

「詳しい」とは言えないけど、ある施設から逃げてきたの、昨日」

「うつ……痛いとこねへりふね」

「それなら家に来る？」

「え？ 悪いよーーそれにシャルロットを巻き込むわけにないかな
いし

「いいのいいの」

「でも…」

「じゅあ、あ、じゅ」

「>?

「私が志季を助けたお返し」

「ダメだよ、また迷惑かけるからお返し!」せ

いいの！私は志季に来てほしいの！！」

卷之二十一

「おだやか」

「お、大きい！もしかして『デュノア』ってあのシェア3位の量産型工
S 製造してるの？」

„... אָרָיוֹתִים אֲרָיוֹתִים...”

シャルロッテは一瞬暗い顔をする

「あ、ごめん無遠慮だつたね」

「えつ！？ う、うううん大丈夫！ さ、入る？」

「うん、1人で抱えすぎないでね」

志季は小さな声でささやくと入っていく

「えい...」

シャルロットはしづかに然とした

「シャルロット？」

「ふえ？… ああつーー今行くーーー」

シャルロットは何か決意したよつた顔で志季の後を追いかけた

「はい、紅茶」

「ありがと」

「……」

シャルロットは黙り込んで、チラチラと志季を見ている

「あ、あのね……」

「ん？」

「私… 本当は愛人との間の子なの、でもお母さん死んじゃつて、こ
つちに引き取られて…」の間一度本邸に呼ばれた時なんて本妻の人
に泥棒猫の娘がつ！…って殴られちやつたよ… ははは… ごめんね、
なんで志季にこんなこと話してんだろ、迷惑だよね… 本当… あは
は」

志季は微笑んでシャルロットの頭に手をのせる

「シャルロットは強いんだね」

「え？」

「そんな辛いことがあつても、逃げ出さないし、1人で耐えられる
なんてさ…でもさこのままじゃシャルロット壊れちゃうよ」

לען... לען... ען...

シヨルのエジヨウから涙が流れ落ちる

「これからは、いつでも、どこに居たって、僕だけはシャルロットの味方だから……」

「うううううんうわあああん」

シャルロッテは壇を切つた。うなぎを出す

志季はシャ川ロットを抱きしめた

「ありがとう…志季…」

「気にしない気にしない、そういえば僕がいるのって本当に大丈夫なの？上手く連絡が取れなかつたら、いつまでになるか分からぬよ？」

「それには任せてしまふ

1人のメイド服を着た女性が入ってくる

「私、メイドのローナ？リューースと言います」

「ローナさんは家の」と金般をやつてくれてるんだ」

「私が本邸の方には上手く繕つておきますので」

「お手数おかけします、僕は如月志季です、これからお世話になります」

「それより、お嬢様はそろそろHISの演習が

「あ、そうだった！…それと、私のことはずシャルロットでいいっていつも言つてるでしょ？」

「しかし…」

「部外者が言うのもあるんですけど、本人が呼んで欲しいって言うんですから、いいんじゃないですか？」

「ならば、志季様が私へ敬語をやめて頂ければそういういたしましょ？」

「えつー？…まあいいで…いいよ？」

「じゃあ私はシャルツて呼んで…」

「え？…だつてシャルロットは関係？」「ダメなの？」「うう」

シャルロットは田に涙を浮かべて志季を見つめる

「分かつたよ…」

「やつた…じゃあこいつてくれるね」

「こつてらつしゃ いませ」

「氣をつけてねー」

「はーー」

シャルは元氣よく出て行つた

「志季様ありがとうございます」

「え? 何が?」

「シャルロット様のあんな明るい姿をみたのは久しぶりです」

「僕は大したことはしないよ、それと、ローナさんももつとシャルに親身に接してあげてね」

「え?」

「僕もいつまでもここにお世話になるわけにはいかないし、1人より2人、多いほうがいいでしょ?」

「しかしメイドが馴れ馴れしくするなつて言ったの?」

「シャルが馴れ馴れしくするなつて言ったの?」

「い、いえ」

「それともローナさんはシャルと仲良くなかったりなの？」

「そんなわけありません……」

「なら決まりだね……！」

「は……」

夕方、シャルの家からいこ匂いが立ちのぼる

「ただいま……！」

「「「おかえりー（なわこ）……！」」

「あれ？ 今日はなにいつもと感じが違つ？」

「おっ……分かった？ 夕食、僕とローナさんで作ったから」

「志季様はとても料理が上手なんです、私も勉強になります」

「どうあえず食べよひ、上手く出来てるといいけど」

「わっ……今日の夕食はローナさんも一緒に食べるんだね」

「『迷惑でしたでしょうか』

「全然そんなことないよ、これからも一緒にいいよね？志季？」

「もちろん、や、食べよう

「『いただきます！』」「

「どうかな？」

シャルとローナは料理を口に運ぶ

「凄く美味しいよ志季！」「

「はい、こんな美味しい料理は初めてです」

「そつかあ、良かつた」

「志季様！—今度私に教えていただけませんか？」

「あつ、私も教えて欲しいな」

「じゃあ今度みんなで作ろうつか、シャルのほうは今日ばかりだった

「えつとね……」

そんなこんなで初日の夜は賑やかに過ぎていったのだった…

II 3 別れ"（前書き）

今回少し展開が早いかもです

あれから、1ヶ月たつた

志季、シャル、ローナの3人は家族のように打ち解けあって笑顔の絶えない日々を送っていた

「志季様、志季様に電話ですよーーー！」

「えつ！？僕に！？」

「はい」

「もしもし、如月です」

「志季か？」

「えつー? タタキさん?」

「志季、志季なんだな！？」

「はい！！」

「そうか…無事でよかつた」

「心配かけてすいません」

「全くだ」

「「うへ、『」めんなさい』」

「まあ、無事だったからいいこれ」

「ありがとう、ちーちゃん……」

「な、懐かしい呼び方だな、どつかの鬼は未だに呼んでるが……」

「僕が呼んでも怒らないんだ」

「い、今だけ特別だ！……それより、もう一つの本題に入ろう、志季、HS学園に入らないか？」

「僕が！？もしかして使えるのバレた！？」

「いや、それはないが、一応お前追われてる身だろ？」「うのまうが安全だ」

「でも、男がHS動かせたら問題じゃないの？」

「それがだな、一夏がHSを動かした」

「…………は？」

「だから、一夏がHSを動かした」

「なんで男なのにHS動かせるの？」

「おーい、お前はどうなんだ？」

「でもさあ、一夏は今、”公式”では世界で唯一エスを動かせる男つてことでしょうか？」

「ああ、わうだな、まあ公式発表は明日だが」

「エリエリエリとねえ、…………しようがない、ちーちゃんの頼みだもんね」

「話が早くて助かる、明後日わいつの最寄りの空港まで迎えに行く」

「うん、分かった、またね」

「ああ」

志季はゆいつと電話器を置く

「わつか…………一夏がねえ…………」

「志季…………夕飯だよー…………」

「はーい…………今行く…………シャルは、大丈夫、かな…………」

志季はシャルに返事をしてから、小さな声で呟くとゆいつと食卓へ向かっていった

「2人に言わなきやいけない事ができたんだけど」

夕飯後に志季が切り出す

「僕、明後日、日本に帰らなきゃいけなくなっちゃった」

「……そつか

「『メソ…』」

「なんで謝るの？志季やつと歸れるんだよ？」

「シャルの力になるつて決めたのに…」

「十分だよ！…ローナも前より親身な態度になつてくれたし…！味方がいるつて思つたら、頑張れるよ！…」

「でも…」

「志季はどこに居たつて私の味方なんでしょ？私は大丈夫…！」

「そつか、ならいいんだ…そういうえば、明日はヒルの演習無いんだよね？」

暗い顔をしていた志季だったが、何か思い立つたようにシャルに尋ねる

「うん、そうだよ？」

「ローナさん、パソコン借りられます？」

「ええ、大丈夫ですが？」

「じゃあシャルのエス一田明日だけ預かってもいい?」

「いいけど、どうするの?」

「それは後のお楽しみ、大丈夫、悪いよ」

志季は不敵な笑みをうかべた

翌日、志季は部屋にこもって、パソコンのキーボードをものすごいスピードでタイピングしていた

「あとは、ソースをソースコード...ソースの値を調節して...よし...ソースなんもんかな!...」

突然、ドアがノックされる

「はーい?」

「志季? 入つてもいい?」

「おっ、シャル、ナイスタイミング!...どうぞどうぞ!」

ゆっくりとドアを開いて、シャルが部屋に入ってくる

「はい、借りてたエス!」

「あれ？待機状態の形が全然違つよ？」

「シャル専用に僕がカスタマイズしといた。仮名でラファール・リヴァイブ・カスタム？って呼んでる。かなりラファールリヴァイブと違うものになつてるので、シャルの戦闘データを僕なりに研究したから、力になつてくれると思うよ。いくら性能がいいとはいえば機だし、第三世代も出てきてるからね、それに何かシャルに残してたくて…起動すれば大体分かると思うけど、一応スペックはこの紙にまとめといたよ」

志季はシャルに紙を手渡す

「あ、ありがとう…えつ…？これカスタマイズつていつレベル越えてるよ！？」

「データを見る限りシャルは操作も上手いみたいだから、多分第三世代にも引けを取らないと思つ」

「志季つてE-S詳しいんだね」

「ま、まあな…」

「まあ、深くは聞かないよ」

「あ、ありがとう」

「でも、会つてそんなに経つてない私にこんな味方してくれるのは…」

「まあ始めは助けてくれた恩返しのつもりだった」

「うん」

「でも、僕って昔、まず小さい頃にある理由でドイツの研究所に売られて、そこから助けられたと思つたら、助けてくれたのがもつとたちの悪いラボでさ、酷い実験されたよ。ドイツではまだ友達いたんだけど、その後は騙された上に酷い実験されたから人間不信になつて、孤独だつた。その後はいろいろ運とか人にも恵まれたから、今こうして元気だけど、どうしても一人でもがいてる人はほつておけなくて…」

「そつか…」

「それに、特にシャルは優しくてかわいいしね…！なんとかしてあげたいつて思つちゃつた」

志季はシャルに笑いかけ言いつ

「ふえつ…？／＼…かわいい…／＼／＼／＼／＼

「シャル？」

「えつ…？…ああ、なんでもない…！…なんでもないよ…！」

「よし…！…今日は2人で夕飯作ろっか」

「ホント…？…やつた…！…よし…！…早くいこ…！」

「ちよつ…！…待つてよ…！」

2人はキツチンに向かって走り出した

2日後

「志季、元氣でね」

「志季様、お氣をつけて」

「うん、2人もね…ローナさん」

「はい」

「シャルを頼んだよ」

「おまかせください…！」

「シャル、君は1人じゃないよ、味方がいるってこと、忘れないで
ね」

「うん」

「シャルのピンチは絶対、僕が助けるから」

「わかった、信じてるよ

「絶対また会えるから…案外すぐかもね」

「そうだといいな」

「……じゃあ、”またね”2人とも」

「「うん（はい）！……」」

志季は2人の別れを終えると、振り返らず走って行つた。

II 4 始まり II (前書き)

今回かなり短いです

志季が空港で待っていると懐かしい人がやってきて、辺りを見回す

「 いじぢぢです！ ！」

志季はその人物に声をかけ手を振る

「 おお、待たせたな 」

「 大丈夫です、千冬さん、そういうえばチケットとかパスポートは？」

「 あちんと用意してあるから大丈夫だ、志季は準備は平氣か？」

「 うん、バツチリ 」

「 じゃあ、行くか 」

2人は東京へと向かっていった

こゝして、よつやく志季は日本へ帰つていつたのだった

「 帰つてきて早速で悪いが今日からもう始業日なんだ 」

「 日程と着く時間的にそんなこつたわつと思つてました 」

「 じゃあ、学園向かうか 」

「あれ？ その前に制服にきがえなくていいの？」

「む、それもそうだな」

「トイレで着替えてくるよ」

志季は千冬から制服を受け取ると、最寄りのトイレスで着替え、出て
くる

「ちょっとアンタ、荷物持ちなさいよ」

見ず知らずの女性が偉そうに志季に命令して来る

「僕急いでるので失礼します」

「はあ？男は黙つて女に従つてなさいよ！私の命令が聞けないわけ？」

（全くたちの悪いのに捕まつたなあ、ISできてから女尊男卑になつてめんどくさいこういう人がでたのがダルいなあ）

「私の連れを煩わせるのはやめてくれないか」

千冬が間に入ると女性は舌打ちをして罵声を放ちながら去つていった

「助かつたよありがと」

「全く、あの手の輩は困つたものだな」

2人は呆れつつ再びHIS学園に向かっていった

40分くらい電車を乗り継ぎ、HIS学園に到着した

「じゃあ、改めてようじくお願ひします、先生」

「ああ、じやうじやうな」

「やつぱりHIS学園は大きいな」

「お、お、この程度で驚いてたり、Hネルギッシュな女子高生どもについていけんぞ？」

「はは、まあ頑張るよ、でもそういうのは一夏の担当じゃない？」

「まあ確かにそうだが、志季も顔整つてゐるだろ？…女っぽいが」

「それは言わない！…」

「ははは、でも志季も覚悟はしておぐべきだと思つた？」

そんなことを話してると教室に到着する

「じゃあ、私が呼んだら入つてこい」

「はい」

千冬は教室に入っていく

数秒後、男の声が聞こえたかと思つと、スパアーンーー!とものすごい音が響く

それを聞いて志季は思わず苦笑いする

その後、黄色い悲鳴が響き志季は思わず耳を押された

その後千冬の声で静かになる

志季はそろそろかと身構える

「志^ク…如月、入つてこい」

案の定呼ばれ、内心で呼び方苗字に直す意味あつたかな?とツッコミつつ扉の前に立ち、深呼吸すると、^{ものがたり}教室の扉を開いた…

= 5 過去への回想 piece 1 =

「うう…うう…はあはあ…」

小学校一年生くらいの子供が傷だらけで意識も朦朧に歩いている

「ぐう…」

そしてそのまま道に倒れる

セレックポニーテールの同年代の女の子がやつてきた

「ん?…お、おい!大丈夫か!…しつかりしな!…」

「うう…」

「良かつた生きてる…!…立てるか…?」

女の子は倒れてころぶ子を立てる努力をする

「軽いな…家まですぐだから、少し頑張れ」

「うう…うう?…うう?」

「田、覚めたか?」「は、私の家だ」

「ああ……僕、君に助けてもらつたんですね、ありがとうございます」

「た、大した」とはないぞ」

女の子は恥ずかしいのか顔を赤らめる

「君、名前はなんて書つんだ？」

「僕は如月志季、7歳です……君のを聞いても？」

「ああ、私は篠ノ之箇だ、私も7歳だ……あつ、そうだと飯が出来て
るんだが食べるか？」

「食べたいつ……あつ、すみません」

「あつはははは……そつちが素なのか、別に氣をつかわなくとも
いいぞ」

「あ、そう?」

「ああ、せり、食べるぞ」

「ありがと、頂きます」

その後2人は意氣投合して仲良くなつた

その夜……

「…………トイレビリダルルハ、」

志季は夜中、トイレを探して部屋を出た

「暗い…………ん？あそこ」の部屋だけ灯りがついてる、

志季は吸い込まれるようにその部屋に入つていった

中では少女がパソコンを前にキーボードを打ち、周りには資料が散乱している

志季はパソコンの脇の資料を見てみる

少女は志季のことを気にもとめず、キーボードを打ち続けている

「これば……す、す」「こ……」

「つわ————」

「つわつ……な、何……？」

「どうしても、ここが上手くいかない————」

志季はディスプレイを見てみる

「あれ？……うなづきどこですか？」

「…………何？」

少女は不機嫌そうな声を上げる

志季はキー ボードを打ち始める

「 いーいを、 いーいこー これがいーいなるかひ…… よー、 いーいだいひー
じゅうか? 」

「 おおひ、 やつかそつかーーなるめびーなーー スゴいねーー體ーー
名前なんて言ひの? 」

「 如月志季で、 「 しーちゃんだね 」 しーちゃんって何ですか! ?
それに僕は男の子ですか! ? 」

「 おおひーーー? 男の娘キターーーー! 」

「 それで、 あなたの名前は? 」

「 束だよ、 祈りやんつて呼んでねーーー 」

「 は、 はあ …… 」

「 やつたよ、 かわいい弟と優秀な助手さんができたよーーーありがと
うーーー 」

「 じゃあひとははやりますばび、 その前に…… トイレビーーーですか? 」

「 あるの、 用意つてあげようかーー? 」

「 場所だけ教えてくださいこーーー。 」

そんなこんなで志季は篠ノ之姉妹の家にお世話をなることになった

篠ノ之宅は剣道場兼神社で、姉妹の父親が剣道場をやっていた

今、志季は篠に連れられて、その道場に来ていた

「一夏……」

「おひ、篠……あれ？ そつちは？」

「僕は如月志季です、訳あつて」 お世話をなつても

「やつが、俺は織斑一夏だ、よろしくな

「はい」

「ああ別に敬語は使わなくていいだ、気軽に一夏つて呼んでくれ、
そのかわり、俺も志季つて呼んでいいか？」

「うそ、改めてよりじへ一夏」

「おひ……」

それから、志季は2人が稽古をしていけるのを観学していた

「志季、志季もやつてみるか？」

「夏が声をかけてきた

「えつー? うーん、やつてみたいけど、危ないかも……」

「大丈夫だつて、防具つけるんだし」

「いや、でも」

「おつーーー! 面白いな」とになつてゐるねーーー!」

「「束さん(姉さん)ーーー?」」

「珍しいですね、束さんが道場に来るなんて」

「こつちー、しーくんに舐めてかかっちゃダメだよ」

「しーくん?」

「……僕の事です」

「ああ、志季の事か……舐めてかかっちゃダメって……」

「詳しいことは言えないなー、しーくんひよつとだけやつてあげて、やつもしないといつちー納得しないし」

「うん、分かった、じゃあ少しだけね」

志季はそのまま竹刀を持って一夏に向かいつつ

「僕は必要ないよ」

「くせ、ケガしても知らないぞ」

一夏が志季に素早く切りかかるが、志季は軽くバックステップで避ける

志季は軽く避けたが、一夏のスピードはこの年齢にして十分早い

「おお、一夏やるね」

「軽く避けといて何言つてんだよつーーー」

一夏が突きを入れるが志季は体を最低限にひねりかわすと、また少し距離を置く

「あの動き…凄い…」

「さすが、しーくんだね」

その後10分一夏が何度も切りかかるが志季は全てかわす

「はあはあ…くせつ…触れる」としゃべりきねえ

「ソレなら止めとかない?」

「志季に触れるまで、諦めねえーーー」

「うーん…」

また一夏が切りかかっていく

「なりしょうがないか…」

志季の姿が一瞬ぶれた瞬間…

「面…」

「へ?」

「す、す''」スピードだ…」

一夏が氣が付いたときには、志季はすでに残身を取っていた

「は、早い…」

一夏と篠が呆氣にとられ、言葉が出ない

その沈黙を破つたのは…

「スッ!」ごよーーしーくんーー」

「うわっ、抱きつくな!!」

「カツ!」ごよーーしーくんもいいけど、やつぱりしーくんはかわいいね

」

「うよつ…やめつ…!」

そんな様子を見て、一夏と篠は思わず笑つてしまつ

「おねーちゃんって、意外と気が利く?」

そういうと束は一瞬優しい表情に変わり

「あの子たちがいい子なだけだよ」

といつと再び志季を抱きしめた

「ほんつとかわいいねしーくん、本当に男の子？」

「全くだ

だからそうだって語つてるじやん！」「

は？

—どうしたの？ — 夏？

—今、志季が男の子で…

いや、たかにそ二、た二、て!!

「夏までえ...

「でも志季本当強いな」

「昔いろいろあつてね…僕とやりあえる同年代の人って今まで1人

しか居ないし」

「ひ、1人…」

「でも一夏も強いと思うよ、その1人には技術では確かに負けてるけど、一夏にはその子に無いものを持つてるとと思うから」

「無いもの?」

「そう、それは自分で気づかなきや」

「そうか…俺、頑張るよ…!」

「うん…!」

そんなこんなで、志季は一夏と篠、束と出合つたのだった

今回はここまで、他の昔のお話は、また別の機会に…

＝6 再会と出会いと…＝

志季が教室に入ると教室に入ると教室中の視線が志季に向けられる

『ガタツ！…！』

「「志季つー…？」」

教室の正面中央のただ一人の男子生徒と窓際の女子が一人突然立ち上がる

「やあ、一夏、第」

「そこ」の2人、座れ…如月も早く自己紹介しろ」

千冬の指示で2人は座る

「如月志季です、特技は機械関係と武術：かな？まあいいや、特別苦手なものはないです、よろしくお願ひします」

パチパチと拍手が起こり、志季は笑顔でお辞儀する

「おい、ささ…もう言ひにくいからいいか、志季」

「はい？何ですか？」

「何ですか？…じゃない…！…全く、一番大事な」と言わなくてどうするんだ…！」

「ふえ！？ 大事な……ああ、はい、えっと、僕、男です」

教室が時間が止まつたように静かになり……

「うわっ！！な、なにっ！？」

「はあ…またか…全く…」

突然の悲鳴に志季は飛び上がり、千冬は呆れかえる

「女の子みたあい！！」

「ああ、いう男の子もいい！…！」

リアル男の娘　おしゃべりめぐる

ケレスの女の子たちが「々に歓声を上げる

ひしー！！（なんか今寒気か…）

「静かにしろ！！」

千冬の一声でまた教室は静かになる

「志季、空ごとひに座れ」

「はい」

志季は席につくと隣のぽわぽわした雰囲気の子が話かけてきた

「しつきい、私は布仏本音だよ、よろしくね」

「…まあいいや、よろしくね布仏さん」

「えつー? いきなり言われてもなあ……ううん……のほほんは一夏がいいそだしなあ……ほん姉とか? うーん、でもお姉ちゃんって感じじゃあ……」

「お姉ちゃん…お姉ちゃん…ふふつ…ふふふつ…私がしつきいのお姉ちゃん…」

「え？ と… お姉ちゃん… がいこ？ (布仏さんってこんなキャラだ
ったの！？)」

それからしばらく本音はトリフォリップして戻つてこず、結局あだ名はほん姉になつたのだった：

セウジンヒンヒュウチに、副担任の山田麻耶先生の授業が始まった

基礎的なことだったので、志季にとつては復習でしかなく、割と余裕だったが…

一夏はキョロキョロと回つを見回しては落胆している

（一夏、もしかしてついていけない？配られた参考書読めはある程度ついていけるとは思つけど）

「織斑君、どこか分からないとこがあつたら気軽に先生に質問して下さいね？」

麻耶はえつへん……といった感じに言つたが、見た目的にはなんとも頼りない…

「せ、先生…」

「はい、何ですか？織斑君」

「ほんと全部分かりません…」

「えつ、ええつ…?…」今まで、分からぬことがある人居ますか？」

しかしその問いかけに手を上げる生徒は居ない

そこで見かねた千冬が一夏のほうへある行つていく

「織斑、参考書は読んだか？」

「ああ、あの分厚いやつ…は…電話帳と間違えて捨てました」

『ガソル』

千鶴の出席簿が破裂する

「再発行してやるから、一週間で覚える」

「いや、あれを一週でやれと云つてゐる……まあ、やつまか

「志摩……」

「あ、ひ、篇」

篇とは一巻と回じへ

「戻つてきつたな、連絡へりて寄越せ……どれだけ心配したと思つてゐるんだ……」

「ひつ面田なこです……でも束さんから連絡行つてゐたと

「志摩……無事に歸つたのか……？」

「あ、一巻、うん、何とかね」

「ひつ面田なこです……」

「ん？」

「何かな？」

話しかけてきた相手は、ロールがかつた金髪でブルーの瞳、その雰囲気は志季が空港で絡まれた人ほどではないにしても、いかにもと
いつた雰囲気だった

「まあなんですかーー！そのお返事、私に話しかけられるだけでも光榮なのですから、それ相応の態度といつものがあるのでは無いかしら」

「それは失礼したね、セシリア・オルコット、代表候補生が何か用

「あなた……分かっていてその口調で「志季、代表候補生つて何?」なつ!?」

「一夏、お前はバカなのか？」

「何だよ筈まで」

「あはは、一夏は家のことで忙しいもんね、えっとね、簡単に言つと、国代表のIS操縦者の候補の操縦者ってとこ、まあ文字から連想すれば分かるけど」

セシリ亞はびしつと一夏に人差し指を向ける

「本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすことだけでも奇跡…幸運なのよ」

「やうが、それはラッキーだ」

「馬鹿にしていますの？」

「そちらのかたはともかく、あなたはエリについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね、唯一男でエリを操縦できるときいていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思つていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「ふん、まあでも？私は優秀ですから、あなたののような人間にも優しくしてあげますわよ」

（（全然優しくない（だろ）（））

「エリでわからないことがあれば、まあ…泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ、何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は？」

「へえ、一夏す」こじちゃん…」

志季がほめると一夏が顔を近づけ

「まあ倒したっていうか、いきなり突っ込んできたからかわしたら、勝手に壁にぶつかってそのまま動かなくなっただけなんだけどね」

と、小声で言つた

「わ、私だけと聞きましたが？」

「女子ではつてこつちちじやないのか？」

「つまり、私だけではないと……？」

「た、たぶん」

たぶん！？たぶん、どういう意味かしら！？」

お落ち着けよ!!……そ、そ、う、た、志摩はもうたつたんだ?」

「僕？僕はや二でないけど？」

は？」

「いや、最初は僕もやると思つてたんだけど、千鶴……織斑先生に「志季の実力は私が認めているからやらないでいい」と言われて……」

「あなた！…それビックリですの！…？」

「どうせいつも… そのままの意味だと感づかば」

そこに休み終了のチャイムが鳴る

「………………また後で来ますわ――逃げないことね――よくなつて――

そういうい残し、セシリ亞は去つていった

「はあ、面倒な予感しかしないよ」

「俺もだ…」

2人は簾を見る

「わ、私にはどうすることもできないぞ？」

「ですよね…はあ、あつ！ 2人とも早く席戻らないと」

一夏と簾は急いで席に着くと同時に千冬が入つてきてはあつと息を
つくのだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4340x/>

陰から光へ放り出されて...

2011年12月21日14時55分発行